

イタリアにおけるパゾリーニ現象
自身の研究をふりかえりつつ

土 肥 秀 行

静岡文化芸術大学研究紀要抜刷

第10巻 2010年3月

イタリアにおけるパゾリーニ現象 - 自身の研究をふりかえりつつ -

The Pasolini Phenomenon in Italy

土肥 秀行

文化政策学部国際文化学科

Hideyuki DOI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

詩人・小説家・映画監督ピエル・パオロ・パゾリーニ Pier Paolo Pasolini (1922-75) をめぐるイタリアでの一連の社会的な現象について概括する。死後30余年を経ていまだ注目される存在であるものの、その都度スキャンダラスな死ばかりが話題となってきた。一方、近年では全集の出版などによりニュートラルな研究基盤が築かれつつある。著者のこれまでの研究もその地平に位置付けられる。またモラルの規範としてのマエストロ(師)像が作り上げられ、左派・右派問わず広範な支持を得ている。とはいえ生前は時代遅れの詩人とみなされ、1960年代の後半から「もと詩人」とでも呼べる姿勢で詩作に臨まなければならぬ試練にも直面している。ここではその一例、1970年の詩「瞑想の語り」を挙げる。

The Pasolini Phenomenon in Italy

The article presents a reading of the whole of the "Pasolini Phenomenon" in Italy. First, the article discusses the unstoppable, even meaningless, succession of images of the assassination scandal which has continued for more than thirty years after the death of the poet. Second, the article tries to find a neutral ground upon which to base these studies about Pasolini; it also attempts to orient future studies on the poet. The article concludes by outlining the shape of a "maestro" for our times, longed for by a vast population of even opposing political orientations. The so-called Pasolini Phenomenon is recognized, but once the poet was regarded as a poet "passed" it forced one to assume an attitude of "ex-poet". Finally, a proposal for the reading of a poem from 1970, *Oral Meditation*, written on commission for a collaboration with Ennio Morricone, will be given as an ex-poet's example.

序

筆者はこれまでイタリアの詩人・小説家・映画監督ピエル・パオロ・パゾリーニ Pier Paolo Pasolini (1922-75) についてモノグラフ研究をしてきた。2005年にボローニャ大学に提出した博士論文 *L'esperienza friulana di Pasolini e i suoi sviluppi (1941-1954)*「パゾリーニのフリウリでの経験とその後の展開(1941-1954)」で一区切り付いた感があるが、アウトプットせずにいるトピックも少なくない。新たな大学で仕事をはじめめる節目に、またようやく博士論文のイタリアでの出版の目途も立ったところで、自分のこれまでの研究をふりかえりつつ、あらためて、今なぜパゾリーニが語られる必要があるのか、いささかエッセイ風の文書にて検討してみたい。「論文」とは異なる性質のため、註を構成すべき事項も本文に含めていることを予めことわっておく。

まずパゾリーニの芸術そのものよりも、イタリアでのパゾリーニ現象とでも呼べるものについて考察することからはじめよう。パゾリーニ受容はイタリアの社会状況に左右され、劇的な変化を重ねてきた。

近年最も多様な動きがみられたのは没後30周年にあたった2005年である(ひとき

わイタリアは記念行事を好む)。筆者の予想、期待というよりも、をはるかにこえて盛り上がった。シンポジウムや回顧上映会など多数のイベント、テレビ放送(国営放送局RAIは、パゾリーニの映像をアーカイブからふんだんに流していた)そしてなんといっても非常に多くの出版がなされ、年間30点を優に越えた。2005年に開催されたシンポジウムの報告集や、博士論文の刊行などによって、翌年、翌々年も高い出版点数が続いた。この何年か、筆者の例を挙げずとも、博士課程でパゾリーニを扱う人は多い。フィレンツェのボンサンティ資料館(ガッダやモンターレ、ベトッキ、カプローニなどの現代作家の手稿を所蔵し、パヴィーア大学と並ぶ現代文学アーカイブとなっている)にパゾリーニの手稿が収められており、閲覧を希望する研究者はたえない。

2005年の関心の高まりが筆者にとって驚きであったのは、2002年(生誕80周年)の低いトーンと比べてあまりにも桁違いだったからでもあった(ちなみに没後20周年の1995年のイタリアも経験したが30周年ほどではなかった)。やはりパゾリーニは、圧倒的にその死によって記憶される人物である、というほかない。生というよりも、当時16歳の少年が犯人とされる死に結びつく。

パゾリーニの生と死

とはいえ、あまり知られていないがパゾリーニの出生事情もなかなか興味深い。父カルロ・アルベルトはラヴェンナの伯爵家の出身であり、母はフリウリ地方カザルサの商家の娘である。母の母はピエモンテ出身であり、そのバラエティ富む血筋から、パゾリーニは「イタリア統一の産物」とたびたび自己規定していた（*Pasolini su Pasolini. Conversazione con Jon Halliday* [1968-71], ora in Pier Paolo Pasolini, *Saggi sulla politica e sulla società*, a cura di Walter Siti e Silvia De Laude, Milano, Mondadori, 1999, p. 1285、邦訳はジョン・ハリデイ、『パゾリーニとの対話』、波多野哲郎・訳、晶文社、1972年、33頁）。それに1922年、ファシストによるローマ行進の年に生まれている。父は、貴族の慣例に倣って将校となり、中尉の位にまで就いた。熱心なファシスト党员として、1925年のマッテオッティ暗殺事件で隠密に重要な役割を果たしたにも関わらず、報いとしての厚遇は得られなかった。要するに「使われ損」に終わった。一説に1926年10月31日にポーロニアで起きたムッソリーニ射殺未遂事件において、犯人の15歳の少年アンテオ・ザンボーニを取り押さえたのがパゾリーニの父とされるが、おそらくデマであろう。その場でリンチにあい死亡したザンボーニが犯人であった確証はなく、謎の多い事件である。いずれにしてもパゾリーニの父は軍隊内で挫折し、虚しさを内に抱えていた。

長男ピエル・パオロも例に違わずファシストとして成長しており、青年大学ファシストGUFの活動に携わる。その一貫で1942年にワイマールで開かれたナチスヨーロッパ作家会議を取材し（イタリアからは夭逝の思想家ジャイメ・ピントルも参加）、ファシズム時代のいわゆる優等生であった。将校の息子として士官学校に入るためのキャンプにまで参加し、1943年9月のイタリアの休戦直前に徴兵されている。後年の反体制知識人のイメージからは想像がつかない、健全なファシスト青年の姿がみとめられよう。

パゾリーニが、父のマッテオッティ事件への関与を知っていたか定かではない。父は終

戦まで3年ほど英軍勢力下のケニアで捕虜生活を送った。そのため精神に異常をきたし、復員後、死をむかえる1959年まで隠居生活を送った。

こうした父と政治的に対照的だったのは、パゾリーニではなく、弟グイド・アルベルトである。行動党に加わりパルチザン活動に身を投じた。そして終戦間際に起こった悲劇、かのボルツスの虐殺事件においてティート派との内部抗争の犠牲となった。こうして父、弟とも20世紀前半のイタリア史の直中にいた。

先ほど指摘したとおり、パゾリーニは死によって記憶される。スキャンダラスな死もしくは謎の死が、常につきまとう一種のアウラを形成している。これはパゾリーニを語る際の障壁と筆者は感じている。彼の死はどのようにこれまで扱われてきたかという、たとえばミステリー作家カルロ・ルカレリによって再三テレビで怪事件として取り上げられる。また最近のイタリアの本ではハリウッド・スキャンダルと並べられたりもする。日本でも有名なマルコ・トゥッリオ・ジョルダナ監督の映画『パゾリーニ、あるイタリアの犯罪』（1995）とその原作本からはじまった流れだ。ジョルダナの映画と本は没後20周年の際に作られたが、2005年には本の仏訳出版までが行われた。彼はパゾリーニに影響を受けているというが、その死をめぐる映画のミステリー仕込みといい、『ベッピーノの百歩』（2000）や『輝ける青春』（2003）でのパゾリーニの詩の恣意的な引用方といい常に見過ごせない歪曲がある。

パゾリーニ現象を死からの周期で検討してみると、1985年の10周年忌は、まだ死の謎についてばかりでトラウマは相当強く、全般的にパゾリーニについて語りにくい状況だった。親しい友人であった小説家アルベルト・モラヴィアは「あれは下層の人々のやっかみがひきおこした事件だ。一番の悲劇は、連中がパゾリーニとは何者が知らずにいることだ」と死の直後から叫び続けていた（一理あり）。その他、作家ダーチャ・マライーニ、女優ラウラ・ベッティといったパゾリーニの友人の言説が支配的であった。

次いで没後20周年にあたる1995年は、回顧の動きにおけるローマ極集中が崩れは

じめる契機となった。つまりローマの文人サークルの存在感が薄まり（モラヴィアはすでに1990年に亡くなっていた）、パゾリーニのフリウリ地方（母の故郷、処女詩集に使用された方言の土地）、パゾリーニのボローニャ（生地、大学に通った街）、という視点をとることが可能となってきた（AA.VV., *Il maestro delle primule: dalla meglio gioventù alla nuova preistoria*, Provincia di Pordenone, 1997 や AA.VV., *Pasolini e Bologna*, Bologna, Pendragon, 1998 に記録が残る）。フィレンツェでも、手稿が留まる関係上、展覧会が開かれた。こうして相対的に、パゾリーニの元友人の発言が全体に占める割合は減っていく。

それでは没後30周年の2005年はどうだったかという、高齢となった友人たちにとっては最後の登場機会となった。在ローマのアーカイブを兼ねたパゾリーニ財団は、資金難ゆえ閉鎖されていた。そこで、ローマで労働組合の雄であったセルジョ・コッフェラーティがボローニャ市長に選ばれてまもなく、その財団の資料を市に買い取らせる措置をとらせた。そうしてボローニャの市営シネマテーク付属図書館内に資料館が入居する。その移設後もない2004年夏、財団をひとりで牽引してきたラウラ・ベッティは息をひきとった。7月の暑い日にこの世を去った彼女を墓地で見送ったのはたったの5人だけであったという。その後、ボローニャのシネマテークは彼女に捧げる特集をいくつか組んだ。ちなみに彼女の祖父はボローニャ大学の学長も務めた言語学者である。ラウラ・ベッティは、キャバレーやレヴューの歌手として舞台で活躍し、『甘い生活』（1960）『アロンサンファン』（1974）『1900年』（1976）といったイタリア映画を代表する作品に出演し、パゾリーニのもとでは、『テオレマ *Teorema*』（1968）『カンタベリー物語 / *racconti di Canterbury*』（1972）で個性的な演技をみせる。皮肉なのが、『エクソシスト』（1973）の迫力ある吹替で一般に知られるところになってしまったことだ。彼女の吹き替えといえば、パゾリーニ作品にもいくつか例があり、『ソドムの市 *Salò o le cento venti giornate di Sodoma*』（1975）の

ヴァッカリ夫人は忘れずにおきたい（フランスでは、亡くなる数日前にパゾリーニが監修した仏語版こそが「オフィシャル」と主張されるが）、いちはやく1978年にパゾリーニの伝記『パゾリーニの一生 *Vita di Pasolini*』を発表した、弟子のエンツォ・シチリアーノ Enzo Siciliano はもはやパゾリーニ研究の第一人者ではなかった。彼は、パゾリーニ回顧年の最中、2005年7月に亡くなる。2003年に完結した全集の編纂は、こうしたローマの人脈とは遠いところでニュートラルに行われていた。

パゾリーニをめぐる言説の担い手の変化の契機は、まさしくメリディアニ叢書におけるパゾリーニ全集の刊行にあるだろう。1998年にはじまり、5年の間に最終的には全11巻という前例のない大規模プロジェクトとなった。ちなみにイタリア文学を代表する詩人ジャコモ・レオパルディですら10巻である。このとてつもない作品量に、評論家フィリッポ・ラ・ポルタ Filippo La Porta は「アンソロジーが必要」と即座に悲鳴を上げていた（*L'Unità*紙 2003年5月17日付）。たしかに未発表の原稿を大幅に取り入れることに当初から大きな反発があった（アントニオ・トリコミ Antonio Tricomi の *L'Indice* 誌 1999年4月号の書評など）。実際全集では、生前に刊行されたもの、未発表であったものが入り乱れ、どれが正当なパゾリーニ作品 corpus なのか見極めるのは困難である。客観的な検討の土台ができたとはいえ、同時に、どうにも扱いようのない巨像＝虚像が提示されてしまったのだ。ゆえにそれまで決まりきった定義に頼ってきた、パゾリーニに「近かった」人々の発言は控えめにならざるうえなくなった。

しかし2005年11月2日の命日が近づくにつれ、パゾリーニをめぐる言説は反動的かつ保守的になる。このような展開に、筆者は残念に思うと同時に「やはり」という気がした。パゾリーニによって町のごろつきから映画監督となった弟子のセルジョ・チッティは、30回目の命日を目前にした自らの死の間際まで「パゾリーニの死の真相を知っている」と主張した。またもやパゾリーニの「死の謎」に関心が集められてしまうのだった。ちなみに

に彼の説に新しい発見はなく、パゾリーニ殺害の前にチネチッタのスタジオで起こったネガ盗難事件のゆすりがうまくいかなかった腹いせ、というものだった。以前から唱えられていた説だが、確かに『ソドムの市』のネガは盗まれているけれども、同時にフェッリーニの『カサノバ』(1976)も被害に遭っていたので、パゾリーニだけがねられるのは辻褄が合わない。唯一、公式にパゾリーニ殺害犯と認定されているピーノ・ペロージ“カエルのピーノ”は国営放送に登場し(これで何度目か)、やっと複数犯であったことを認めた。とはいえかつて裁判所の判決にも記された公然の事実であった(「未特定者との共犯」と1979年にペロージは裁かれた)。チッティの告発を受けてお決まりの再捜査請求が出され(その後却下)、さらにはどちらかというパゾリーニ後の若い世代に属する評論家ジャンニ・デリア Gianni D'Eliaまでもが、未完の小説『石油 *Petrolio*』に死の真相があるなどと言い出した。物語の途中、「覚書その21、エニへのスポット(ENI「炭化水素公社」はイタリアの石油戦略をうけもつ電力供給公社)はなぜ本文が抜けているのか、重大な秘密を含んでいた原稿が盗まれ、さらにパゾリーニは消されてしまったのではとの推論である(*L'eresia di Pasolini. L'avanguardia della tradizione dopo Leopardi*, Milano, Effigie, 2005などにおいて)。すぐさま反論が上がり、パゾリーニの姪で版權継承者グラツィエッラ・キアルコッシ Graziella Chiarcossi(文献学の大家アウレリオ・ロンカッリアの弟子)は、そのような盗難はなかったと証言している(*La Repubblica*紙12月31日付)。2006年に生誕100年を迎えたエニの元総裁エンリコ・マッテイの1962年の飛行機事故死は、未だタブーで陰謀が解き明かされることはない。パゾリーニの死とマッテイの死が、共にミステリアスに扱われて、いかがわしく重ねあわされるというレベルにまで後退してしまった。

エンリコ・マッテイといえば、公社に身をおきながらも、アメリカやイギリスの石油メジャーを“セブン・シスターズ”と呼んで果敢に挑戦を挑み、また原油国にOPEC結成をはたらきかけたイタリアの雄である(もちろんクリー

ンでない面も多々あるが)。1950年代から1960年代にかけて、同じようなエネルギー問題を抱えていた日本でも注目され、今なお出光佐三とも比される存在である。マッテイは生誕100周年を2006年にむかえ、イタリアで再び話題となった。その動きにあわせたのか、2005年末にはパゾリーニの件の小説『石油』が、1998年に出た全集版とは異なる新たなエディションでオスカル・モンダドーリ叢書に入れられた。改めて校訂を行ったのは、全集も担当したシルヴィア・デ・ラウデであるが、マッテイ事件につながる「陰謀説」をおおわせるような新注釈といい、真っ黒の表紙といい、どこか話題作り先行型の出版であった(彼女は文献学の基礎もあやしい)。パゾリーニといえばスキャンダルという一般のイメージをあおる動きに加担しては研究者としておしまいである。パゾリーニ自身は、スキャンダルすなわち「動転し憤ってさわざたてること」をブルジョワ的態度として忌み嫌ったのを思い出してほしい(1963年のドキュメンタリー映画『愛の集会 *Comizi d'amore*』の電車内でのシーン、「あなたは憤ってさわいだり scandalizzarsi しますか」とパゾリーニは一等車の乗客である紳士にたずねる)。

『石油』とは1970年代のイタリアのアレゴリーであるが、作者パゾリーニがかぎとっていたのは、いわゆる「鉛の時代」の空気であった(もちろん「鉛の時代」とは1980年代になってから作られた用語である)。これまで「鉛の時代」は、1969年12月12日のミラノのフォンターナ広場にはじまるとされていたが、パゾリーニはそれよりはるか以前のマッテイ事件を起点とする時代観をもっていたに違いない。しかしパゾリーニの『石油』とは関係なく、こうした1960年代から1970年代を一続きでみなす傾向は、いまや一般に浸透しつつある(さらにはイタリアのフリーメーソンP2の発覚する1980年代までも続く)。つまり1968年や1977年の「革命」による断絶はない、とする見方である。少なくともイタリアの国家 *stato* の在り方についてはそう言えるかもしれない。

没後 30 周年オマージュとマエストロ待望論

さて筆者自身はなにをしたか。やはり 2005 年は特別な年であったかもしれない。先に、ボローニャ大学でパゾリーニについての博士論文を提出した、と書いた。他にも 2005 年 3 月にフィレンツェのヴェッキオ宮殿の二百人広間を会場とし、「象徴と時代」文化協会 Associazione Segni e Tempi によって催されたパゾリーニについてのシンポジウムで報告を行った。同年 2 月に 90 歳で亡くなった詩人マリオ・ルーツィが代表を務めていた協会である。このシンポジウムへの参加を、フィレンツェが生んだ 20 世紀を代表する詩人へのオマージュとしてもとらえていた。さらにボローニャのパゾリーニ財団との共催とあっては、ボローニャとフィレンツェで活動する筆者が出ていけないわけにはいかない。そこでデビュー時のパゾリーニにおけるルーツィの影響について語った。うったえるべきは、フリウリ方言で書かれた有名なパゾリーニの処女詩集『カザルサ詩集 *Poesie a Casarsa*』(1942)とルーツィの散文集『エーベ日記 *Biografia a Ebe*』(1942)の同時代性であり、両タイトルに認められる a という前置詞の破格的な用法がいかにも錬金術派(エルメティズム)的であることだ。そうパゾリーニ自身も評しており、ルーツィの影響を認めるが、下って 1950 年代末に 2 人は論争を行う。パゾリーニはルーツィに代表されるエルメティズムを批判し、過去のものとして清算しようとする。それは自らの作家生命への危機感ゆえであり、案の定、1960 年代に入るやいなや、今度は「最新詩人たち」によってパゾリーニの文学が否定される。

2005 年 12 月のフィレンツェ大学イタリア文学科でのパゾリーニ・シンポジウムには著者は不参加におわる。せめてパゾリーニの専門家が中心となって全体をオーガナイズしてほしかったのだが、結局、散漫なプログラムとなった。フィレンツェ大学のマルコ・マルキはパゾリーニについてこれまで折に触れ書いているが、3 月の会には参加したものの 12 月の会には関わらなかった。

これまで 30 回忌の報告をしつつ、最近の

パゾリーニを巡る動きを描いてきた。あらためてパゾリーニ現象について考えてみると、いま彼が持ち上げられるのは、主に 1970 年代前半に書かれた社会評論ゆえであるといえよう。保守派を代表する新聞「コッリエーレ・デッラ・セーラ」などでの連載をまとめた『海賊論集 *Scritti corsari*』(1975)や死後出版となった『ルター派書簡 *Lettere luterane*』(1976)における文明批判、義務教育撤廃、反テレビ、アルカイックな過去へのノスタルジー、反進歩、反グローバル化、反ヨーロッパといった主張が、最近になって共感を得ているのである。21 世紀になってしまった混迷期における予言者＝預言者期待論がパゾリーニに向けられた。いわばイタリアでよく言われる「マエストロ」(師)の不在に対し、パゾリーニはなんらかのかたちで応えてくれる。カリスマ待望論ならぬマエストロ待望論である。マエストロとしてのパゾリーニ像は、たとえば現在もイタリアの良心として注目を集める前民主党党首ヴァルテル・ヴェルトローニについての記事において、学生時代の彼がパゾリーニと共に映っている写真がしばしば用いられることから確認できる(『Il Venerdi』誌 2009 年 8 月 21 号など)。パゾリーニは現在のリーダーの洗礼者であった、ということなのだろう。

盟友ラウラ・ベッティが監督した 2001 年のドキュメンタリー映画『パゾリーニ 夢の論理 *Pasolini: la ragione del sogno*』(翌年の東京のイタリア映画祭で上映)の最後のシークエンスでは、合成によって現在のニュースの現場にパゾリーニが立ち会い、「現代の英雄」として描かれる。主に左派の知識人や若者に支持されるが、それだけでなく右派の人々にもうけがよく、これは生前の状況からは考えられないことである。彼はイタリアの左翼や若者からもそっぽを向かれていたのだから。1990 年代末からパゾリーニは、「良識」としての保守を吸収してきたが、離婚反対や中絶反対を唱えるのはむしろ、欺瞞を斥け、離婚や中絶が可能であれば即りベラルというわけではない、という逆説による批判的態度の表明であることに気付くべきであろう。

時代遅れの詩人

実際、彼の社会評論がアクチュアリティをもつか疑問である。たしかに「均一化 Omologazione」、「非文化 acculturazione」、「文化の抹殺 genocidio culturale」、あるいは「人類学的変質 mutazione antropologica」などと今では頻繁に用いられるキャッチフレーズを流布させたのはパゾリーニである。しかしこれらの用語のもとにはグラムシがいたことを見逃してはならない(アントニオ・グラムシの用語法について、筆者は2009年2月にボローニャ大学イタリア文学科でレクチャーを行った)。それに、パゾリーニの友人かつライバルであった詩人フランコ・フォルティーニが喝破していたように、1960年代に社会学の分野ですでに言われていたことをパゾリーニは繰り返したにすぎない。とはいえパゾリーニにおいてはマスメディアの使い方が新しく、必ずしも大衆の支持は得られたわけではないが、1970年代の時流に乗ることは果たされたとはいえよう。テレビに代表されるメディアの批判をさかに行っていたパゾリーニだが、実はそれとうまくたわむれ利用する術を知っていた。パゾリーニを偶像視する向きには不快かもしれないが、この点は指摘されるべきである(たとえば、1970年の『デカメロン Decameron』がボルノとつけとめられてヒット作となったのは、予想外というよりねらいのうちだったのではないか)。メディアをうまく使ったが、やはりパゾリーニに新しい主張はなかった。1960年代においてすでにイデオロギーの消える時代、テロの時代の到来は予想されており、実際1970年代はそのとおりとなった。

予言者のように扱われるパゾリーニだが、実は1950年代の終わりに時代を読み誤っていた。それは新資本主義の到来が見抜けなかったことを意味する。新資本主義とは高度成長時代、マスの創出(プチブルの出現)、規範の見直し、ヒエラルキーの崩壊などといった一連の現象を伴って生じたものである。戦後に流行ったネオレアリズモでもなく、1950年代半ばに興った実験主義でもないといわれるなか、先に書いたように、パゾリーニ

ニは「時代遅れ」とみなされるようになった。もはや文学は、ブルジョアあるいは知的エリートの戯れではありえず、新前衛派へと向かう。文学は終わり、パゾリーニは文学的に終わった。まさしくこの時期に彼は映画を撮りはじめた。と同時に、文学的に終わった詩人、時代遅れの詩人、「もと詩人」として書き続けていく。

「もと詩人」としての姿勢は、機会に応じて詩を書くことにあらわれる。1962年からは、映画台本への付録(映画撮影の合間に書いたという体裁で)、あるいは散文の合間に挿入されるものとして詩が発表される。詩の可能性、または不可能性における詩は、1960年代における言語一般の変化によってひきおこされたとも考えられよう。フリウリ方言詩でデビューし、イタリアにおける純粹詩を標榜していたパゾリーニには常に詩語の問題は切実であった。もともとイタリア語ではなく方言こそ詩に適していると考えていたパゾリーニにとって、イタリア語の変質に伴い、詩語そのものの概念を変えなければならぬ事態となっている。それが「もと詩人」としての再出発につながったのだろう。1960年代半ばにいたっては、『実験室より(マルクス主義的言語学のための詩的覚書) *Da il laboratorio (Appunti en poète per una linguistica marxista)*」(1965)に代表されるように、言語学的、さらには文化人類学的、記号論的なアプローチによる評論活動に精を出している(新たなアカデミズムへの接近は多分にジェスチャーでしかないようにも映る)。そうして書き貯められたものは1972年の論集『異端的経験論 *Empirismo eretico*』にまとめられることになる。

「もと詩人」の詩とは、「~のような詩」である。たとえば「抒情詩のような詩」の例となりうるのが、1974年の詩集『新しい青春 *La nuova gioventù*』であり、今日パゾリーニの最も美しい作品集とされる1954年の『最良の青春』のリメイクとなっている。しかも1954年にフリウリ方言で記されていた詩は、1974年の新しい方言である折衷語(テクニカルな標準イタリア語と方言の混声言語)によって書き直される。そこには、1970年代におけるアルカイックな文明の喪失にあわ

せた内容の改変も伴われる。こうした根本的な社会考察と言語的な作業を経た詩は、あくまでも偽抒情詩的のしか呼べなくなってしまう。だから詩人本人によって、『新しい青春』は評論集『海賊論集』とあわせて読むべし、と指定される。かつてパゾリーニが志向した純粹詩は不可能となっているのだ。

1970年代の詩

ここで具体的に、「もと詩人」の「抒情詩のような詩」となる例をひとつ挙げてみる。1970年の「瞑想の語り *Meditazione orale*」である。映画音楽の大家であるエンニオ・モリコーネの旋律のためにあえて用意された、まさしく「共作」と呼べる詩である。よって1960年代に頻出した、機会に応じて作られる、頼まれ仕事としての詩である。詩はもはやこのようなものでしかありえないというひとつの例となろう。

ちなみに注文主はローマ市当局であり、遷都1000年を記念したレコード向けであった。ローマの下町すなわちボルゲータの詩人という1950年代のかつてのイメージをみずから再生産しつつ、ラジカルな社会構造の変革（例の「人類学的変質」）を抒情詩的感性でもってとらえている。自己のパロディという手段を用いた新たな社会批評のかたちといってもいい。

詩人本人の朗読と、モリコーネの現代音楽（実は彼の持ち味はこれにあり、パゾリーニ監督『テオレマ』での仕事が思い出される）が重なりあった作品であり、良質の録音が残っている。今ではインターネット上で比較的簡単に見つけられるだろう。

瞑想の語り

ローマは植民市であった
バカンスに訪れるところ
多くの人が住んでいた、社会的立場を明確にしない詩人たちが、
役人からは自由でも、警察にはいくらか畏れを抱いている。
20世紀には晴れ間が足らなかった。
消えゆくものは刹那の痛みをもたらす。

唯一真なる痛みは夢のなかにあった。夢のなかでは
この街を永遠に去らねばならないようだった。
植民市を惜しみ泣くことはない、それでもこの軒の下で大半の歴史が流れていった（日没の色でもって）
非情な歴史だった。
ファシストとリベラルのあいだの賭けだった。
意外にもリベラルが、臆病でどこか間抜けだったが、
（度胸のない南部人たち）
賭けに勝った。強き者がうち負けされたのだった。
国家機関が知らぬところで大半の歴史が流れていった
しかし涙がこの街の夢に降り注いだ、奇跡のように、まったく理解不能だ、激しい涙が、宇宙に降り注いだようだ、帰還なき出発のための別れの涙
それからバカンスがまたはじまり、孤独のあくなき願望もはじまる。
このアスファルトの上を大半の歴史が流れていった
8月の太陽にもびくともしない岩の壁に沿って、
大半の歴史が流れた。年老いた議員たちが、かくれず
厳かにたたずんで
自らの場所を取り戻す、笑みと厳めしさで支持者に向けて、世界と調和しつつ。
レアリズムは人それぞれ！
輝かしい北部と秘された南部において
賭けに勝った、
民衆の笑いかブチブルの真面目さか
とにかく再確認された自負が
階級から解放された詩人の巡礼を再開させ義務も予定もない詩人
ひとしきり泣いたあとに、ありえないことに
あの孤独の欲求。
自分にそのままとおいた、完全なる幸せを与えてくれる孤独。
夢のなかで泣いていた目は
いまも見つめている

制限時間も終わりもなく。
 この先ずっと昼や夜を使って。
 歴史が忘れていたことしか起こらない時間。
 もちろんだとも、本気じゃないさ。
 バカンスだったんだ
 まったく非難のもとでしかなかった
 ローマは新たな戦いの中心地だった。
 この野蛮人はどこからやってきたんだ？
 なに、ここで生まれたのさ、メルラーナ街、
 エウクリデ広場、
 チェントチェッレなんかで。だいたいいく
 らか元気がないのがいい。
 そうすれば彼らの父親の顔そのものだ、敗
 北の父や勝利の父、
 とはいえ一様に過去にうもれている、涙が
 なんの意味もなく、
 孤独の欲求は本気でない。
 歴史はふたたび流れはじめた、
 しかし午後4時の駐車場には静寂と太陽が
 あり、
 コンコルディア宮のうらの空き地には誰も
 いなかった

P.P.P., *Meditazione orale* [1970], da
Poesie per musica, in Id., *Tutte le poesie*,
 vol. II, a cura di Walter Siti, Milano,
 Mondadori, pp. 1325-1326

意味がとれたとしても不可解な詩である。
 ただ「永遠の都」の記念事業であることを鑑
 みれば、パゾリーニにとってのローマが、処
 女長編小説『生命ある若者 *Ragazzi di vita*』
 (1955) や初監督映画『アッカトーネ
Accattone』(1961)の舞台となった前近
 代的なスラムの集合体であるユートピア(理
 想郷かつ非存在との意味における)ではなく、
 1970年代的な陰謀うずめく官庁 Palazzo
 (すなわち権力 *Potere*)の街とのメタファー
 を帯びる転換期をむかえていることはわかる。
 しかし Palazzo は、ここではまだ「国家機関
 Ministeri」と直接的に呼ばれる。1975年の
 死の直前に纏められた『海賊論集』で繰り広
 げられる Palazzo 論から、その後、ジャーナ
 リストであるエンツォ・ゴリーノが取り上げ
 ることで、この語は政治用語として一般にも
 浸透した(Enzo Golino, *Pasolini: il sogno*

*di una cosa. Pedagogia, eros, letteratura
 dal mito del popolo alla società di massa*,
 Bologna, Il Mulino, 1985)。同じくパゾ
 リーニの指摘した「ホタルの消滅」が、いま
 では1970年代のトボスとしてアルカイック
 な文明の消失をあらわすようになっている。

注意すべきは、この時期の詩を、作者自ら
 「まずい詩」と呼んでしまっている点である。
 この定義が実際に用いられたのは、パゾリー
 ニが学生運動に異をとらえた、1968年の詩
 「イタリア共産党を若者に *Il PCI ai giovani!!*」
 に付した「弁明」の文中である(*Apologia*, in
 «Nuovi Argomenti», n.s., n. 10, aprile-
 giugno 1968, ora in P.P. Pasolini,
Bestemmia: tutte le poesie, Milano,
 Garzanti, 1993, v. IV, p. 695、詩の邦訳
 は四方田犬彦、「藝術学研究」第4号、明治
 学院論叢544、1994.3, pp. 60-63)。対
 極として念頭にあるのは1940年代から
 1950年代の自己愛の詩、それも方言詩で
 あったろう。「まずい」と言ってしまうのは、
 もちろん方便であるが、1960年代末の扇動
 的な態度さらには美的判断の回避のためで
 あったろう。

一方で1971年から1973年にかけて失
 恋の悲しみ(監督作品の多くに出演したニ
 ネット・ダヴォリが結婚したことによる)を
 こめた連作『趣味のソネット *L hobby del
 sonetto*』をひそかに書きためていた。もち
 ろんシェイクスピアの模倣であって、純然た
 る美しい詩だが、当時発表されることはな
 かった。いわゆる抒情詩を依然として書けた
 わけだが、それはきわめて個人的、自らにと
 ておくべきものであって、「まずい詩」や散文
 のような詩とはまったく異なる扱いであった。

上に例として挙げた詩と同種のものが、『テ
 オレマ』(1968年当時としてはめずらしく
 メディアミックスとして映画と同時に小説が
 発表されている、邦訳1970年講談社刊)の
 巻末、あるいは『王女メディア』(邦訳1973
 年講談社刊)の付録に、米川良夫氏の訳で確
 認することができる。すなわちそれらは異な
 る構造のものなかに紛れ込むもの、パゾリー
 ニが生涯通して好んだ「パスティーシュ」を
 生みだすものとして副次的に存在している。

結

当時まったく見向きもされなかったパゾリーニの「まずい詩」だが、皮肉にも、近年編まれるアンソロジーにおいて1970年代以降のイタリア詩を代表するものとしてあらためて評価されている（たとえば *Il pensiero dominante. Poesia italiana 1970-2000*, a cura di Franco Loi e Davide Rondoni, Milano, Garzanti, 2001）。

一般的にもいま1970年代の詩に関心がいく。というのも時代自体があまりに重すぎて、そのときしか通用しない詩が残されてしまったからだろう。もちろん詩に限った現象ではなく、1970年代の芸術はあまりに時代性が強く、その時にしか共感・共有できない性格をもつ。当時、そのような事態を自覚していた人は少なかったろうが、パゾリーニは極めて意識的であり、時代性のなかにあえて自分を投じたのではないだろうか。時代性とは、それに居合わせた者にとってはまったくアクシデンタルなものである。もともと普遍を目指すべきものである詩を、恣意性に委ねてし

まう確信犯パゾリーニであった。

スキャンダラスな存在としてパゾリーニをみなし、死の瞬間ばかり取り沙汰する傾向に抗って、無作為に作品を取り上げてパゾリーニを照射してみたい、それが当論考の隠れたねらいのひとつであった。それは死を特権化しないためである。パゾリーニの最初期の詩について討論していたとき、全集の監修者ヴァルテル・シーティは「パゾリーニにとって死はさほど意味はない」と言った。死はそれくらい当たり前であり、死は遍在するということでもある。

本稿では昨今の「パゾリーニ熱」について述べてきたが、最後に2007年より毎年発刊されている国際的な学術専門誌「パゾリーニ研究 Studi pasoliniani」を紹介しておきたい。パドヴァ大学のゲイード・サンタート教授を中心に編集がなされ、パゾリーニ学の確立と今後の新たな展開を主眼としている。著者の論文「日本におけるパゾリーニ *Pasolini in Giappone*」が2010年秋発行の第4号に掲載決定との過日の知らせと共にこの小論を終えたい。

